
神様の道化 ~ The tale which clears fate ~

unknown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の道化 ｝ The tale which clears
fate ｝

【Nコード】

N6673Y

【作者名】

unknown

【あらすじ】

定められた運命の中で動く者達。
一人の男は見た。世界の破滅の瞬間を。
破滅を阻止するために希望が動き出す。
はたして彼らは運命を乗り越えることができるのか。

オリジナル作品

処女作

厨二病

駄文

至らぬところが多いですが
読んでくださると
とても嬉しいです。

注意 必ずお読みください

うp主話とても馬鹿です

そして変更が多いです

誤字脱字の修正ならいいのですが

思いつきり設定を変更する場合があります
読んでいて

「あれ。こいつこんな感じだっけ？」

みたいなことを思ったら

たぶんどこかで設定を変更します

そういうことがないように

極力気をつけますが

そういうことになることもあると思います

誠に申し訳ございません

そして

「処女作 厨二病 駄文 至らぬところが多い」
です

そんな感じの馬鹿ですが

どうかよろしくお願いします

注意 番外編について

番外編と書いてある小説は

本編とは関係ありません

本編を更新した後に

割り込みで入れる場合があります

だからキャラクターの説明がなかったり

同じ説明を2回したりします

ちなみに

番外編を入れる理由は

本編だけだと

展開が速いからです

こんな感じになってしまいましたが

よろしくお願いします

誠に申し訳ございません

ちなみに本編には

タイトルに

英語が付いています

以下文字数補助

注意 更新について

更新についてです

基本的に土日の更新が多いと思います。

テスト週間とかあるとかなり遅くなります
なるべく早くしようと

がんばりますが

アイデアが出なかったり

忙しかったりすると

かなり遅くなるかもしれません

正月とかはちょっと

無理かもしれませんが

誠に申し訳ございません

以下文字数補助

序 章 プロローグ

人は未来を一度だけ見ることができる

それで見た未来は変わらない

それは「運命」は変わらない

覆せない

そして私は見た

私が希望を壊し

私が世界を壊し

私が世界を再構成し

私が頂点の世界を創るところを

これは変わらない

「運命」だから

創った世界に争いはない

永遠の平和

それは私の追い求めてきた

「夢」

それは実現となる

さあ始めよう！

「夢」を「現実」しよう！

私が世界を創るのだ！！

ここから絶望が始まる
そして希望が動き出す

これは運命を切り開く物語

番外編

剣道は面が付いていると痒いです（前書き）

番外編は本編とは全く関係ありません
なおこれは2章より後に書いたものでキャラクターの説明など
はありません

番外編

剣道は面が付いていると痒いです

「なあ」

「なんだ」

「一つ聞いていいか」

「なんだ」

「鎧はずしていいか」

「だめだ」

「何故だ」

「危険だからだ」

「だってさあ」

「なんだ」

「痒いんだよ」

「耐えろ」

「しかも暑いんだよ」

「耐えろ」

「汗も拭けないし」

「耐えろ」

「無理」

そう。俺は今とても暑くて痒いのだ。

なぜって？剣道をやればわかる。

熱い。痒い。汗が拭けない。という状況なのだ。んで。俺は鎧が付いてるせいでその状況の中にいる。

この俺の同僚真面目ちゃんは何故耐えていられるのだ。

「あゝゝ。もういいやはずそ」

そう言って俺は鎧を外す。あ。ヤベエめっちゃ涼しい。猛暑日のと

きの車の中から一気にエアコンの効いた部屋に飛び込んだ感じた。

「はずすな莫迦」

「うるせえ。莫迦。黙れ。こんなもん耐えられつか。10分後につける」

「勝手にしろ。魔物に襲われて死んでも知らんぞ」

「そんなときやお前を盾にする」

「断る」

「お前に拒否権なんてねえから。おめえの席ねえからあ」

「断る」

「なあ」

「何だ」

「お前好きな人誰だ」

「ハア！？何でいきなりその話になる！！関係ねえだろ！！」

「いや。気になったこと話すぐ効きたい性格だから」

「知らねえよ」

「いいから答えてくれ」

「断る」

「頼む。答えてくれ」

「断る！」

「答える」

「命令形！？」

「チッ」

「舌打ち！？」

糞。腹立ってきた。首を絞めてやる。

「さあ！吐けえ！早く言えええ！！」

「ぐう！やばい吐きそう・・・。」

俺の言いたい「吐く」とこいつの言いたい「吐く」はおそらく違う意味なんだろうが気にしない。

まあいい。俺は小学生じゃないから別にそんなことどうでもいいがな。手を離してうやる。

「なあ」

「なんだ」

「いつまでサンタクロースを信じてた」

「お前は急に話の話題を変えるな」

「言え」

「忘れたわそんなもん」

「クリスマスにしか仕事をしない糞爺がいたらすごいけどな」

「何故だ」

「だって給料ほとんどもらえんぞ。生活費どうすんだ」

「一度にたくさんもらってるのかもしれないぞ」

「確かに」

「なあ」

「なんだ」

「雪合戦ってあるだろ」

「あるな」

「あれってどうやったら勝ちなんだ」

「知らん」

「俺こんなルール考えたんだ」

「なんだ」

「雪玉にナイフを入れて眉間に命中させたら勝ち」

「死ぬだろ」

「じゃあ3回当てたら勝ち。もちろんナイフ入り」

「痛いだろ」

「だってそうでもしなきゃ「はあ？お前何言ってるの。俺あたってねえし。何wwなの？莫迦なのwwww？死ぬの？www」ってう

やつが出るだろ」

「そうだな」

「あとさ」

「なんだ」

「お団子へアーってどうやってやるの」

「知らん。お前髪長いんだからググって自分でやれよ」

「めんどろ」

「そうか」

「あとs「もういい。俺に聞くな。面倒臭い」スンマソン」

あと3時間。無言でいなきやいけないのか。

「はあゝ・・・」

3時間後

「交代だ」

「お疲れしたー」

オワター＼(＾o＾)／

さあ帰ろつ。帰りましょう。

何故だろう。この願いはそげぶされたように簡単に消えそうなんだが・・・。まあ。気のせいだろう。

「おーい！レイ！今から飲みに行くぞー！」

そう。気のせい、気のせい。幻聴だ、幻聴。たとえそうじゃなかったら、俺はどんな手を使っても逃げるぞ。

「おーい！」

後ろを振り向く。オヤジがいる。気のせいだ、幻覚だ。きっと疲れでんだろうな、俺。このまま無意識のまま世界10周ぐらいしそうだ。前を向こう、前を。そうだ上を向こう。

「上を向いて歩こう　涙がこぼれないように　思い出す春の日――
人ぼっちの夜　……………」

FULLで全部歌ったぞ。

さあもう一度後ろを向こう。そこに「奴」がいたらそれは幻覚じゃない。

「……………」

幻覚だったら良かったのにな……。

全力疾走　全速前進！！

「待てレイ！人の誘いを断るのかー！」

「誰が待つかー！！俺は疲れてるんだ帰らせるー！」

捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！
捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！
捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！
捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！
捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！
捕まったら殺される！捕まったら殺される！捕まったら殺される！

「はぁ・・・はぁ・・・。死ぬかと思っただぜ」

そんな気持ちのまま逃げ切った。

と思っていた。3秒前までは・・・。

「見つけたぞ」

なん・・・だと・・・。莫迦な。あれだけ走ったのに「奴」はまだ
疲れた様子はない。

そうだ！こうなったらあの手を使おう。

「あつ！メイド服&猫耳猫尻尾+絶対領域ロリータ少女だ！！」

「何っ！！??」

勝った。この勝負、俺の勝ちだ・・・。アハハハハッ！俺に
ひざまずけ！ひれ伏せ！！俺に負けた屈辱を覚えろ！！アハハハ
ハハっ！！！！

あいつがロリコンで良かった・・・。ありがとう。オヤジ・・・。
俺は迷わず走った。

「なんてな」

何故だ！？なんで「奴」がここにいる。瞬間移動か？いや。こいつ
は能力をほとんど使えないはずだ。いや、そもそも何で騙されなか
った。この手を使えば「奴」は確実に騙されるはずだ。　ならな
「教えてやるよ」っ！

「そんなのがいたら、我が気づかないはずないじゃないか！！」

そうだ、忘れていた。この手のやつはこういうことにはかなり敏感なのだ。

「さあ行くぞ。飲みに行くぞ」

襟首を掴まれ、そのまま居酒屋に連れて行かれた。

この時レイ・テイスは思った。なんで家に帰って鍵を閉めるというそんな小学生でも思いつきそうな簡単なことが俺に思いつかなかったのだろうか。後になって後悔した。

そしてこの日俺はめっちゃ飲まされた。明日絶対二日酔いだな・・・。

番外編

剣道は面が付いていると痒いです（後書き）

「上を向いて歩こう」はFULLで歌詞を書こうかと思ったけど、著作権がどうだからとかいって面倒臭いことになりたくないのでもめました

本編第一章 光は影を作るように 〈If hopeful, desp

転回速いです

「あゝ。つたく、ふざけんなよあのオヤジ。完璧二日酔いじやねえか。やべえ気持ちわる」

俺は割と普通な22歳だ。名前はレイ・テイスという。昨日この72歳のオヤジと飲んでいたら、親父に強制的にニートラルスピリッツを飲まされた。俺はアルコールには強いほうだが、エタノール95%以上の者を飲まされたら流石にやばい。しかも2リットルほど。治癒能力を使って二日酔いを治す。

「飯でも食うか」

着替えてキッチンに向かう。

午前9時。

久々に今日は早く起きた。飯は食った。今日は休日。仕事は門番で、魔物なんか来たらそいつを張つ倒す役だ。休日のほうが給料出るのが面倒臭いから俺はやらない。ニートになりたくないなのでコートを出してくる。ちなみに膝ぐらいまでの黒色。その上からベルトをつける。上下のボタンを1つ外したようなやつだ。裾とかには白い線がある。

「行くか」

ケースに入っている剣を持って家を出る。

家を出たとたんに昨日のオヤジが全力疾走、全速前進で走ってきやがった。ギネス記録保持者もびつくりだ!!

「はぁ・・・はぁ・・・。つ、疲れた・・・」

「オヤジ。もう年なんだからそんな走ったらポツクリ逝っちまうぞ」
「なに。わしはまだ死なんぞ。いやそんなことはどうでもいい!!」

俺にはどうでもよくないように思えるが・・・。

「つか、何の用だよ。こんな朝から。もうちょっと静かにできんのか」

「五月蠅い!!早く来い!!」

「なんだよ。うわっ!手引っ張るんじゃない!ふざけんな!なんで拉致されなきゃいけないんですか!!」

なんでこのオヤジこんなに力があるんだよ。ちなみにコイツの別名「元気すぎる爺」だ。

「で、なんだよ。ただの城下町の広場じゃねえか」

城下町には噴水がある。

「あれを見る!!」

オヤジが指さしたものの。それは・・・。

「このロリコンがー!!!!!!」

俺はオヤジの後頭部に思いっきり回し蹴りをした。

「ゴフツー!!」

このくらいじゃこいつは死なない。コイツの別名「ロリコン爺」。

「何をする貴様ー!!」

「うつせー黙れ、この変態糞爺が!! テメエこれのことで俺を呼ぶの何回目だ!!」

「何故だ!! 何故貴様にはロリっ娘の良さがわからんだ!!」

「わかるわけねえだろ! 俺はノーマルだ!!」

「何故だ! つとすまない。実はこの話をするために来たわけじゃないんだ」

「最初っからそう言え」

「実はだな。あの噴水を見てほしかったんだ」

「噴水?」

噴水がどうかしたのだろうか? 俺は噴水を見る。

「水が止まってんな」

「そうだ。たぶん誰かがこの『アクア・スフィア水魔石』を取ったんだろう」

「たぶん、城の中の連中だな。奴らは前から『スフィア魔石』欲しがってたからな」

魔石とは魔力が籠ったいいしのことだ。ものによって効果は違うし所有者によっても変わる。

「そういうことだ。これは水害からこの街を守ってくれている。もしもなくなったら大変なことになるかもしれない」

「俺が調べろって言いたいんだろ」

「そういうことだ」

俺はため息をつく。

「わゝたよ。行ってやる」

「流石レイ君」

こうして俺は魔石を探すことになった。

午後9時

俺は城の門の前にいる。門番に見つからないように隠れている。城
への入り方は、まあ『瞬間移動^{レポート}』でいいだろう。

「瞬間移動」

はい、潜入成功。さて魔石を探しますか。
右側から魔石の力を感じる。

5分後

「ここか」

ここに来るまでにだれにも見つかったないのは、能力で気配を完全に消しているからだ。つーか、あのオヤジはこの力のことを全く知らないはずだ。まさかあいつ適当に俺に言ったな。俺にこの力がなかったら、絶対こんなこと出来ないぞ。ちなみに俺はこの力を隠している。俺は常人の使える力を遥かに上回っている。隠すのはほかに理由があるがあまり考えたくない・・・。

扉を開ける。

「あつた」

水魔石を見つけた。

「さて帰るとs「何なにやってるのかなア」っ!？」

俺は振り返った。そこには男がいた。髪は背中に届くぐらいまであり、赤く、何故か右側の一部が黄色い。服は紫に赤い線の入ったズボンにフードつきの黒いジャンパーを羽織り、中には青色のTシャツを着ている。そして両腕には指のところに刃のついた小手のようなものが付いている。身長は140ぐらいだ。

何故ばれた? 確実に気配は消したはずだ。それにコイツから感じる力は大きすぎる。こいつは普通の人間じゃない。何者かに力を受けた奴だ。何とか能力で見ることができたが、小手の中には刺青がある。そして俺の左目が紅くなる。俺は戦うときには左目が紅くなる。

「死の魔眼」だ。

「お前は誰だ。お前、普通じゃないだろ」

「やっぱりわかる。僕は混沌の闇から力を受けたものの1人。破壊のリクレイ。覚えといてねエー。アヒヤヒヤ! で、君はなんていう名前。こっちも教えたんだから僕にもおしえてよ」

「レイ・テイス」

「レイ・テイスか・・・」

奴は少し考えてから言った。

「ネエ」

「キミモ」

シンデミナイカ！！

小手を向けて俺に向かって飛んでくる。

「くっ！」

何とか手に持っていた剣で攻撃を防げた。そのまま相手を押し返して投げ飛ばす。敵は受け身を取って、態勢を立て直す。

「よく防げたねエ。ひよってして君は普通じゃない人間？」

「そっちがその気なら、俺もやらせてもらうぞ！！」

俺はは剣を抜いて飛んだ。剣のケースと鞘は別の空間に消した。また取り出せる。

俺は相手に突きをする。このままいけば奴は串刺しだ。だがそれは紙一重でかわされ、腕をかすっただけだ。少し血が出ている。

奴はその傷を見て。

「アハハハッ！！いいねエ！！最高だよオオ！！痛めば痛むほど、血が吹き出るほどアドレナリンが分泌される！！くそつたれがアア！！！」

コイツ狂っている・・・。

奴が飛んでくる。今度は俺を小手の刃で切り刻むつもりだ。両手を使って攻撃してくる。

奴は両手を開いている。ギリギリまで相手を引きつけて、手を閉じようとする瞬間に俺は剣の柄頭で相手の眉間を殴り、さらにそのまま剣を逆手に持ち斬り上げる。が、捨て身で俺に攻撃をしようとする。流石にかわせん・・・。

「ぐっ」

右肩をえぐられた。次の攻撃をされる。リクレイの腹を蹴り上げる。

「グッ！」

そのまま吹き飛んでいく。だが・・・。

「すべてを焼き尽くす地獄の炎よ。我に敵対する者を焼き尽くせ！
ヘル・フレイム！！」

「チッ」

俺を囲むようにリクレイの周辺に出た8つの炎が弧を描き、俺に向かう。

「解！」

俺は魔力を解き放ち炎を相殺する。

「敵を貫く氷の刃よ。その刃先で悪しき者貫け！ブリザード・ラン
ス！！」

大量の先の尖った氷が俺を突き刺そうとする。

「瞬連斬！」

全ての氷を高速で叩き割る。

「やるじゃないかア。ここまで耐えたのは君が初めてだよ。おめでとう記録更新」

「そりやどうも。新たな記録を作れてうれしい・・・」
「ですよ!!」

俺は奴に向かって跳ぶ。

リクレイは右手を出す。俺の攻撃を抑えようとするつもりだ。しかし・・・。

「剣殺！」

リクレイの小手は壊れた。これは相手の武器を破壊する技だ。

「何っ!!」

そのままリクレイの胸元を横に一閃。

「グハアッ!!」

大量の鮮血が溢れ出す。ちなみに、眉間からも血が流れている。

「畜生!! やってくれるじゃねエかアア!!」

『やめろ、リクレイ。勝手な行動をとるな』

「!?!? 誰だ!!」

この部屋には俺とリクレイ以外誰もいないはずだ。

「チッ。仕方ない。君との決着はまた今度にしよう。それじゃあ・
」

マタアオウ

その言葉には殺意が籠っていた。

そう言ってリクレイは瞬間移動でその場から消えた。

何だったんだあいつは。まあいい、とりあえず魔石は手に入った。
帰ろう。

俺も瞬間移動でその場を後にする。

午後9時

『ピンポーン』

インターホンを鳴らす。

「何だ。今忙しいんだ。暇だったからテレビ見てたんだよ。邪魔す
んな」

「暇だったならそれは忙しいとは言わない。それより。ほら。やる
よ。取り返してきた」

「おお！マジか！よくやったぞ。じゃあな」
『ボタン』

ふざけんな。勝手に話し終わらせんな。まあ別にいいがな。とつとと家に帰ろう……。

俺は家に帰った。ちなみに肩の傷は治癒で直した。
あ。ヤベえ。北門のほうから魔物の気配を感じる。行くのめんどくせえ。しかもなんでこんな大物が来てんだよ。

「はあ。いくしかないか……。瞬間移動」

はい到着。戦ってる。かなり向こうのほうで戦ってるけどな。門番とか城の兵士とかで戦ってる。ちなみに魔物は蟹みたいなのだ。10メートルぐらいあるぞ。しゃあない。苦戦してるみたいだし行くか。翼を能力で創る。これは自分の体に羽をつけられる。これがあれば浮遊が可能だ。鳥の羽みたいのじゃない。原形をとどめていないから炎のように揺らめいている。ちなみに色は黒だ。俺の能力でできた炎や氷などは全て黒色になる。俺の闇の力が働いているのだろう。

翼の力で浮遊する。そのまま魔物の方へ飛ぶ。

「くそコイツ強すぎる。なんでこんなのがここに……」

俺の同僚が言った。手貸してやるよ。

「ウィンド・カッター」

風が蟹を斬る。体に無数の傷がつく。だが大したダメージはないようだ。

「なっ！レイ！！お前その羽根は・・・」

驚くだろうな。普通翼を出せる人間なんてほとんどいない。

「お前ら離れてろ。終わらせる」

自分の前に魔法陣を創る。

「ドラゴン・ブレス」

極太のレーザーが魔法陣から出る。5メートルぐらいはあるな。レーザーがあらゆるものを破壊する。

煙が上がった時には。周辺にあった木も岩も、そして蟹も跡形もなく消え去っていた。兵士たちは啞然としていた。

「レイ・・・。これはいつたい・・・」

同僚が聞いてくる。

「こういうことだ。俺はこの力を隠してた。ただそれだけだ」

俺が力を隠すには理由がある。・・・あまり思い出たくないがな・・・。

「じゃ。そういうことで、俺は旅に出ようと思う。色々異変が起きているんだ」

俺は瞬間移動で家に帰る。

「あつ、待て!!」

呼びとめようとしてが俺は無視した。

今俺は旅へ出る準備をしている。まあ大抵のものは能力で創れるから電気のブレーカーとかガスの元栓を閉めているだけだ。

10分後

「さて。行きますか」

瞬間移動で家から街の外へ出る。家の鍵は閉めた。この能力は本当

に便利だ。気付かれないようにしたい時とかは毎回これを使う。

街もかなり小さく見えるところまで行った。

『ガヴヴヴウウ』

「あ？」

魔物だ。いきなりかよ。狼系のモンスターだ。鳥属系もいた。地上が2体、空中が2体、合計4体だ。

「ん？」

狼が一匹色が違う。通常黒っぽい色だがコイツはとても綺麗な銀色だ。アルビノか？そしてかなりでかい。3メートルぐらいはあるのではないのだろうか。

「まあいい。かかってこい」

狼が一匹攻撃してくる。銀色のほうではない。鞘に入っただまの剣をしまっておいた別空間から出し、そして殴る。

そのまま地面にたたきつけられ即死。ほかの鳥2体が来る。1回転して2体を薙ぎ払う。そのまま吹っ飛んで地面に落ちて死んだ。残り1体。コイツは殺す気はない。剣を消す。

「一緒に来るか？」

無言で俺に近いしてきた。案外素直だな。魔物は、『コントロール・リング
操作輪』という
ものを使って手なずけることもできるが、普通に魔物との仲を良く
したほうが信頼関係はかなり違いが出る。

「決めた。お前は今日から「ハク」と呼ぶ」

銀色は最初、白色に見えたから。そして白しろから白はくにしてそして「ハ
ク」だ。

「ガウ！」

どうやら気に入ったらしい。能力を使えば考えてることなどもわか
る。あまり使わないがな……。ちなみに魔物にも有効だ。

そして俺はハクと一緒に再び歩き出した。星と月明かりだけの真っ
暗な夜道を……。

本編 第二章 正体不明に人は恐怖する 〈It is one of the

今回も転回速いです。はい

午前10時

夜が明けるまで歩いた。途中何度か魔物に出くわしたが可らしい。普段1体で来るやつが集団で来たり、集団で来るやつは1体で来たりしていた。やはりどこかで異変が起きているのだろう……。それとハクはなかなか強かった。街が見えきた。

「あれは、ウォリアか」

水の都 ウォリア 海が近くにあり、川などもたくさんある。街の中にも噴水など水を使ったものが多い。そして街の真ん中には城がある。「シキ」というやつがその皇帝だ。

流石にハクを連れていくことはできない。ハクには「封獣石^{リア・ストーン}」に入ってもらった。これは魔物はこの石の中にしまっておくことができる。持ち運びができるというわけだ。

俺は門に向って歩く。・・・てつきり門番に止められると思ったんだが。そうだ思い出した。ウォリアは結構警備が軽いほうで中に入るのは自由だ。

来るのは初めてだな。本当に水が多い。人工の小川みたいなのがたくさんある。まあ溝より少し広い程度だ。水はとてもきれいだ。この水は汚れひとつない。水もつたいなくないか……。自然に出てくるものだし別にいいか。ここの水は沢山の山の湧水が集まっている。だから水は余るほどある。ミネラル・ウォーターとして世界に販売されている。俺も飲んだことはある。

え？何あれ。15歳ぐらいの茶髪少女がめっちゃでかい荷物持って歩いている。髪は肩口らへんの長さで茶髪。右側にヘアピンが2つ付

いている。白いカッターシャツにグレーのミニスカート、さらにオーバーニーソックス。コレ前にオヤジが言ってた絶対領域ってやつだろ。ちなみに、「ミニスカートの丈：絶対領域：オーバーニーソックスの膝上部分」 4 : 1 : 2.5」が絶対領域らしい。そして白衣を着ている。何の意味があるのだろう。頭にはまるで映画のセットに使いそうなサイボーグがつけてそうなとても似合わないでかいゴーグルをかけている。めっちゃ注目浴びてるぞ。何か荷物が重くて困ってるようだし助けたるか。ちなみに身長は155センチ程度だ。

「お困りかな」

side???

「あゝもう！重すぎる！こんなことならもっと荷物減らしてくるんだった。あゝ重い」

私なんでこんな荷物持ってたろう……。異変が気になるからつて言つて「ちよつとコンビ二行ってくる」みたいなので旅に出たはいいけど……。家を出たとたんこれってどゆこと？先が思いやられるわ。誰か助けてくれないかなあ。はあ……。ため息ついた。幸せは逃げないから大丈夫。

「お困りかな」

.....

キタ (。o。)

!!!!!!

kkkkr!!

マジ！！これ現実！！？幻覚じゃないよね！！？ここは助けてもらうしか……。

「とても困ってます。はい。進行中で」

長髪、長身の男だった。髪は黒く腰まで伸ばしている。瞳の色は紫色。黒いコートに、黒いズボン。右手にだけ指先の出た黒い手袋。黒いブレスレットに黒い首飾り。・・・どんだけ黒いのよ！！よく見たら靴、いやブーツか。ブーツも黒いし！！しかも真夏にこの格好って可笑しくない？ねえそのの君もそう思うでしょ！！ちなみ身長は180ぐらいだった。これが私と変な黒い男との出会いでした。

「俺が手伝ってやるよ。どうせ時間はあるし」

sideレイ

「とても困ってます。はい。進行中で」

やはり困っていたか。

「俺が手伝ってやるよ。どうせ時間はあるし」

「えっ。いいんですか！？じゃあ、お願いします！！」

そう言って頭を下げる少女。俺は荷物を片手で普通に持ち上げる。

「なあ。中に何が入ってるんだ？」

「おもに銃です。ナイフとかもありますけど」

そりゃ重いわな。そんなもんが大量に入ってたら。

「なんでまたそんなもんが。どっか狩りににでも行くのか？それと敬語じゃなくていいぞ」

「じゃあ普通に話します。えつと最近魔物の様子がおかしくなってるの。おそらく「エア」に乱れが原因だと思う。んで、私はそれを調べに行くってわけ」

エアとは魔力の流れで風みたいなものだ。

「ちなみに最近の研究で、魔力とエアは全く同じだってことがわかったんだよ！　すごくない！！これ私が調べたんだよ！！」

「知ってる。エアが人間の魔力を回復させて魔力も発動させた能力もエアだってことは1万年ぐらい前から知ってる」

「え？　何で知ってるの！？　まだ非公開の情報なのに！！」

「さて、なんででしょう」

そんなこと俺が知らないわけないだろう。

3分後

門の外までついた。

「ありがとうございました！！おかg「伏せろ」グヘっ！」

魔物来てるっの。俺は少女の腹を蹴って強制的に伏せさせる。魔物が少女を飛び越えて俺に飛んでくる。それを殴って吹っ飛ばす。

「いつまで寝てる。起きろ。お前も戦え」

魔物は62体。封獣石からハクを出す。

「でかつ！！こんなのに勝てるわけn「俺の仲間だ」マジっ！！」

少女が武器を取りだす。銃だな。小さめのやつ2つ。ゴーグルをつける。なるほどあれは戦闘で使うのか。俺も剣を取りだす。さあ始めよう。

side 少女

「ありがとうございました！！おかg「伏せろ」グへっ！」

いきなり蹴られた！？

「いつまで寝てる。起きろ。お前も戦え」

え？何、魔物？多くない！？50ぐらいいるよ！！

私は起き上がる。何か私の隣にめっちゃでかいのがいるんだけど。

「でかつ！！こんなのに勝てるわけn「俺の仲間だ」よかった・・・

」

なんでこんなものこの人はもってるんだろう。

とりあえずバッグから銃を取り出す。名前は・・・まあいいや。ゴーグルも下ろす。これは風向きとか相手までに距離までとかがわかる。

あれこの人いつから剣持ってたっけ？確か手ぶらだったような。

「行くぞ」

男が走り出す。魔物の首を落とす。返り血すら浴びない。その調子で次々と魔物を倒していく。しかもあの剣鞘から抜いていない。私には唖然としていた。銀色の才力ミも、魔物を食いちぎったり、爪で斬ったりしている。私も負けてられない。1体に銃を向ける。風向き北北西に2メートル。気温35度。魔物のまでの距離12メートル。発砲。

私の撃った弾は見事に眉間に命中。即死。

「よし！命中次行くよ！！」

魔物までの距離3メートル。こちらに向かってくる。測っている時間はない。

バックからナイフを即効で取り出し突き刺す。私をなめんな。科学者の私はアンタのどこが急所なんて知ってたんだよ。一撃で死にいたる。返り血を浴びる。気持ち悪い……。ふと見ると戦いは終わっていた。

「終わったぞ」

「ですね」

「なあ、お前さ」

「何？」

「俺と一緒に来るか？目的は俺と一緒にみたいだし」

「行きます！！」

「いいのか？厄介事に巻き込まれるかも知れんぞ」

「はい！行きます隊長！！」

「そうか」

即答。この人といれば死にそうになさそうだし。1人より2人で行ったほうが楽しいし。

「そうか。俺はレイ・テイス。こっちはハク。よろしくな」
「ガウ！」

そう言って手を出す。

「私、リイナ。リイナ・マティ。よろしく！」
「よし。とりあえず返り血を洗ってこい」
「あ」

こうして私はレイと一緒に旅に出た。がもう少しここを見ていきたいということなので、数日はまた家に帰ることになった。
そしてもう一つ。レイが「門番手伝えよ」と愚痴っていた。

本 編 第二章 正体不明に人は恐怖する 〈 It is one of the

3分あればカップラーメンが作れます

けれど私は2分ぐらいで食べたほうがおいしいような・・・

人の好みは違います

番外編

昔話は実は怖かったりします

「ねえ。なんで私と旅に出ようとしたの？目的が同じだっただけなの？」

返り血のかかった少女リイレが聞いてくる。

「まず理由は4つだ。1つは目的が同じだったから」
「で。後の3つは？」

「2つ。君は計画性がない。こんな大量の荷物を持っていて困ることとわかるはずだ」

「うつ……。確かにそうだけどもさ……」

重いんだぞこの荷物。今も俺が持っていてやっているんだぞ。10キロぐらいかな。腕が疲れてきた……。

「3つ。君はまだ弱い。門の前で戦ったときに君は魔物を2体しか倒せてなかったじゃないか」

「弱いつて……。そんなストレートに言わなくても……」

「4つ。君だけで旅に出たら……」

「出たら？」

「確実に死んでいた」

「ぐはっ！……。傷ついた……。すごく傷ついた。ないか大切なものを失った気がする……」

「以上」

何でこんな莫迦なんだろうか。

「君は本当に科学者か？科学者にしては莫迦すぎるんだが」

「何それ！？ひどっ！ちよつと酷すぎない！？」

「いや。事実だし」

「酷い。この人酷い。こんな人間いたんだ」

「なんだその言い方は。人を鬼畜人間みたいに言いやがって。事実を言って何が悪い」

「そういうところが酷いつて言ってるの！！」

「そんなことはどうでもいい」

「どうでもよくない！」

「なあ。桃太郎とか竹取物語とかってあるよな」

「無視すんな！！」

「あれって何で斬れなかったんだろうな」

「どうゆうこと？」

「数ミリのずれが出れば奴らは死の世界へ……。そんな昔話も読んでみたくないか？」

「子供が泣くわ！！」

「昔々あるところにおじいさんと糞婆がいました」

「何その言い方の差は！」

「おじいさんは村へ人間を狩りに、糞婆は家でニート生活をしていました」

「婆働け！爺人殺すな！」

「そして婆の家に桃が降ってきました」

「どこから落ちてきた」

「おじいさんが戻ってくると「なん……。だと……。この桃はでかすぎる」と言っで日本刀を持って「さっそく食うぞ！」と言いました」

「包丁じゃないのか！？」

「そして桃をぶった切りました。そして桃が割れました。その時に聞こえた断末魔は幻聴で見えた赤い液体は桃の汁で中にいた腕のない糞餓鬼は「生まれつき腕がないんだね」と納得しました」

「つつこみめんどくなってきた」

「糞餓鬼は「桃太郎」と名前が付けられました。なんともかわいそうな名前です。」

「・・・」

「餓鬼はすぐに成長し1時間で身長2メートルのマフィアのような男になりました」

「・・・」

「そして即効で家を出て行きました。鬼退治に行くとかで銃を村人から奪い取り黒いスーツにサングラスをかけ出かけました」

「そして犬に出会いました。そしてその犬は「ンだデメエ。こつち見てんじゃねえよ」と言いました。桃太郎は銃で犬の眉間を撃ち、射殺しました」

「キジに出会いました。「お前鬼退治に行くんだろ。5万で手伝つてやるよ」と言いました。桃太郎は5万円渡しました。しかしキジと歩いている途中に逃げようとしたので射殺し金を取り返しました。「そして猿に出会いました。「鬼退治に行くんだろ。財産の8割でどうだ」と言いました。桃太郎は財産をすべて自分のものにしましたのでそのまま猿を射殺しました」

「そして鬼ヶ島へつきました。そして鬼をすべて撃ち殺し。財産を手旅に出ました。めでだし。めでたし」

「こんなのでどうだ」

「ごめん途中から聞いてなかった」

「どうでもいいが家に着いたぞ」

「ほんとだ」

「とつとと返り血洗ってこい。それと俺は数日間ここにいるから旅に出るのは1週間後ぐらいだぞ」

「わかった」

家に入っていくリイナ。リイナってなんかめんどくさい名前だな。よしこれからリナと呼ぼう。

「ただいまあゝ」

「お帰りいゝ。旅出るんじゃないかったの？もしかして諦めて戻ってきた。うわっ！何その返り血！。早く洗ってきなさい」

「わかつてる」

家に入っていくリナ。

「あら。あなたは？」

「レイ・テイス。大量の荷物持ってたから手伝ってやった」

「そうなんですか。私リイナの姉のフィルと申します。けどなんで戻ってきたんですか。リナは」

「返り血を浴びてたから俺が帰らせた」

そんな感じでリナの姉と話していた。

「なぜこうなったし」

「一人で何言ってるの？」

現在の状況を説明しよう。俺はいまりナの家にいる。なぜかつて？一緒に旅に行くということと言ったらこうなった。そして俺は今昼飯を食わせてもらってる。こんなつもりじゃなかったのにな……。昼飯はその辺のファミレスで喰おうと思ってたんだが。

「そしてこうなった」

「だから何言ってるの？」

「レイさん。まだありますからどんどん食べてくださいね」 ↑リナ

のお袋

「あ。はい。ありがとうございます・・・」

「全くリイナは。出発早々に助けてもらうなんて・・・」↑リナの姉
「そうだぞ。だからあんなに持つてくと言っただろ」↑リナの親父

午後10時

結局夜まで家にいた。

「レイさんちよつと飲みに行きませんか？」↑リナの親父
「別にいですよ」

ちなみに他の家族はもう寝ている。寝るの早いな。

「レイさん結構飲めるほうですか」

「まあ飲めますけどね」

「良かった」

「あ」

俺の携帯が鳴っている。確認。俺は電話に出なかった。なぜって「オヤジ」って書いてあったからだよ。だが何回もかかってきてついに出ることにした。

「はい。もしm『レイ。貴様どこにいる！』うるせえよ莫迦」

俺は携帯から耳を遠ざけた。ほんとに五月蠅い。この五月蠅い居酒屋の中でも10メートルぐらい離れてても聞こえるんじゃないかってぐらい。俺は電源を切った。もうかかってこない。

「出なくていいんですか？」

「いいんだよあんな奴。いくら死んだって」

酒入ったらタメ口になっちまった。

「うちの娘はなあ。ときどき莫迦な時があるからなあ……。はあ」

知らねえよ、んなこと。急に言われても困るわ。

「一応科学者なんだけどなあ……。」

いやだからそんなこと知らねえよ。聞いてねえから。俺は居酒屋のオヤジじゃねえっての。愚痴られても困るわ。

「後先考えず突っ走るからなあ……。」

「知らn……。」

「何か言いましたか？」

「いや……。何でもない……。」

危ねえ。つい口に出しちゃった。

「レイさん。うちの娘はそういうところがありますがどうかお願いします」

「え？……。いああ……。その……。はい。わかりました」

そんなこと急に言われてもなあ……。まあ一緒に旅するってことで年上として面倒は見るけどさ……。そんなこと言われてもなあ。

「娘を末永くお願いします！！」

結婚のあいさつじゃねえよ。何を言い出すんだコイツは。

「お。青年。結婚するのか？」↑居酒屋のオヤジ
「いや。違いますよ」

おい。あんたのせいで誤解されたじゃねえか。リナの親父よ。そんながっかりした顔すんじゃない。テメエ俺に娘の結婚かけてただろ。ふざけんな。俺は特に結婚する気もねえよ。

「いいなあ。その年で結婚なんて。俺なんて33のときに結婚だぜ」

居酒屋のオヤジよ。俺はそんなこと聞いてない。しかも俺は違うと言ったはずだが。貴様話聞いてねえな。

「んで。あれがうちの女房だ」

聞いてねえ！！

「青年よ。これは俺からのちょっとしたお祝いだ」

煙草もらったんだが。俺吸わねえし。しかもめっちゃもらったんだが。紙袋一つぐらい。まあ吸えないことはないから一応貰っておくか。能力で無害のものにすればいいし。

「あとライター」

ライター20個貰いました。

「結婚祝いだ！！どどん飲めえ！！」

強制的に飲まされた。まさかこれは・・・！！やっぱりそうきたか。ニュートラルスピリッツだ。はあく。明日は絶対二日酔いだな。

案の定。俺は次の日、二日酔いだった。ヤベエ気持ちわるい。

そして俺は思った。あの居酒屋のオヤジ、俺のいた街にいた奴と同一人物だったてことを。

本編 第三章 再始する者たちは 〈The strength of li

今回ちょっとグロいかもしれませんが
というかグロあります

「リナ。そろそろこの街を出るが、お前はどっする？」

「うん。大丈夫だよ。代替準備できてるし」

この街で1週間滞在していた。

色々調べたが異変とは特に関係はなさそうだったしな。

「わかった。親に挨拶して来い」

「了解」

10分後

「ただ今戻りましたあ」

「そうか。じゃあ行くぞ」

そんな感じで俺たちは街を出た。

リナ。かなり荷物が減ったな。それでも結構あるがな……。まあ困ったら俺が別の空間へ送っておいていいがな。

そういえば雪合戦ってどうやってたら勝ちなんだろう？

ちなみにリナというのはリイナの俺なりの呼び方だ。ん？何？何でかって？だってそのほうが呼びやすいだろう？

そんなことを考えていると街を出ていた。

さてリナには俺の能力について話しておかないとな。

「リナ。君に話しておくことがある」

「何？」

「俺の能力についてだ」

そう言っただけ俺は能力のことについて説明した。普通の人間より上回っていること。闇の力が働いていること。過去のことは話さなかった。当たり前だ。アレは人間には言えない。俺達は決めたんだ。俺たち化け物だけの人間に話してはいけない事だと、俺達5人で決めたんだ。

「さて、どうする？車を能力で創ってそれで行くこともできるが」

「色々調べながら行きたいけど……。まあ、道路を進んだほうが安全だから車で行く。荷物も重いし」

「わかった」

都は東京みたいなもんだ。少しそこから離れれば普通の住宅街に入る。佐藤の名字って多いよな。そんなことはどうでもいい。住宅街の周りに塀があつてさらにその上には結界がある。魔物がいるせいで塀の外に建物を作れないのだ。街と街はつながっているのだが俺は外を歩いてウォリアまできた。

能力で車を創る。ばれないように。もちろん色は黒だ。ちなみに地球にやさしい電気自動車だ。

俺たちは車に乗る。

何？そっちの世界に東京はあるのか？あるわけねえだろ。は？じゃあなんで東京を知っているだ？質問が多い！まあ説明するとこんな感じだ。あれだ。別世界ってやつだ。世界はいくつもあるやつその中の一つがここだ。俺は世界を行き来できる。だから日本にも行ったことがある。

まあそんな感じだな。

5時間後

「おい。着いたぞ。起きろ」

「うゝん・・・後3千年・・・zzz」

「そんなに寝てたら死ぬっつーの。起きろ莫迦」

俺はリナの頭をたたく。こいつ車に乗った30分ぐらいで寝やがった。だから起こそうとしているのだが。

「起きろ！」

もう一度頭を叩く。だが。

「あと1万年・・・。zzz」

「増えてる」

そうか。その気なんだな。わかったよ。そんなにたたき起こしてほしいんだな。ああわかってる。だから何も言わなくていい。

俺は能力でハリセンを創る。

「いい加減起きろー!!」

リナの顔面にcritical hit!!

「いったー!!何すんのよー!!」

「お前起きないのが悪い」

「だからってそんな強くだたくことないでしょ！」

「そんなことはどうでもいい。それよりもう着いたぞ」

「どうしてもよくない！！女の子の扱い方が悪すぎる！！」

「アーハイハイ。ツギカラハキヲツケマスヨ」

「女の子に暴力を振るっちゃダメって教えられなかったの！？」

「俺は「女の子に暴力を振るっちゃ駄目」ではなく「人に暴力を振るっちゃ駄目」の間違いだと思うが」

「確かに」

くだらない会話を終えて都に入る。

風の都 ウィン ここは風を使うものが多い。皇帝の名は「テイルガ」顔を見た者はいないらしい。ここにはかなりでかい図書館がある。どうせリナはそこに行きたいとかいうと思う。調べたいとか観光してみたいとかで。いやほんとにでかいんだぞ。この世界で一番の大きさだ。東京ドーム4個分ぐらいかな。しかも上にもでかいから、だいたい体積でいえば東京ドーム12個分ぐらいかな。

「ねえ。図書館行こ。調べたいし観光としても行きたいから。

案の定。そうくると思った。

「好きにしろ」

「つしゃゝ。じゃ行ってくる！」

「何かあったら電話しろよ」

全力疾走していった。

「さて。そろそろ出てきてもいいんじゃないか？」

「アレ？やっぱりばれてたア？アヒヤヒヤ！。またあったねエ」

「できれば会いたくなかったがな」

剣を取り出す。左目が紅くなる。この魔眼は能力開放みたいなものだ。

「上から許可が出たんだア。君は色々と邪魔になる存在だから・・・」

コロシテモイイツテネエ！！

リクレイが飛んでくる。奴の右手にはナイフがある。この前俺が壊したから右手の小手はない。

ナイフで突き刺そうとする。体を後ろに倒して攻撃をかわす。俺はほぼ水平の状態だ。そのまま左足でリクレイの腹をけり上げる。だがそれは左手でつかまれる。小手の刃が左足に刺さる。バク宙をして。リクレイを飛ばす。体勢を立て直し、走る。奴はまだ宙にいる。そして跳ぶ。そのままリクレイの上まで跳び下突きをする。

「斬降牙！」

「無駄だよ！」

リクレイがナイフを投げる。ナイフは家の壁に突き刺さる。何か光を反射して光っている。何だあれは。そして俺は理解した。

「極細のワイヤー！」

リクレイはワイヤーを引っ張って攻撃をかわす。どうでもいいがかなり目立っている。またりまえた。こんな街中で戦ってた目立つのは当然。

「チツ。はずしたか・・・」

次の攻撃に切り替える。

壁を蹴って飛んでくるリクレイ。俺も地面を蹴って跳ぶ。そのままリクレイをたたき落とす。そのままさらに畳み掛ける。

side 三人称

レイは止むことのない怒涛と攻撃をする。リクレイはそれは防御する。だがその攻撃は急に終わりレイはリクレイの腹をけり上げる。

「グハッ！」

リクレイは嘔吐する。レイのブーツには鉄がくっついていて。これで蹴られればダメージは大きい。そのままリクレイの頭を鷲掴み、壁に投げつける。さらに剣を突き刺すがかわされる。だが左足でこめかみを蹴ろうとする。

「ぐっ！」

声を上げたのはレイのほうだった。

「貴様まさかつ」

「そうだよ。この小手の刃には毒が塗ってあるからね。君の足をつかんだときに毒が体に入ったんだよ」

「チッ」

レイ足の毒で動けない。

「形勢逆転だねっ！！」

ナイフがレイの肩に刺さる。

「ぐあっ！」

「アッハハハハハハ！！！」

リクレイはレイの体を滅多斬りにする。腕。足。腹。背中。肩。あ
るゆる場所へナイフで切りつける。

「ウインド・カッター・トルネイド！！！」

「何っ！？」

竜巻がリクレイの体を切り刻む。そしてその攻撃はレイでもリクレ
イでもない第三者からの攻撃だった。

s i d e ???

見知らぬ誰かが戦っている。

僕には何故戦っているかはわからない。だからどちらの見方をして
いいかはわからない。

だけど・・・。

背の低い人のほうが長身の男を滅多斬りにしている。殺そうとして
いる。

だけど僕は人が死ぬのは見たくない。

だから僕は・・・。

「風よ。無数の刃を出し。敵を切り刻め。ウインド・カッター・ト
ルネイド！！！」

だから僕は攻撃した。背の低い男のほうを。

「何っ！？」

風が男を切り刻む。

しくなるから殺すただけに攻撃をしてくる。それ以外は何も考えないから動きも読めなくなる。とても厄介だ。

「コロスコロスコロスコロス・・・」

さつきからこれしか言っていない。

剣から火花が飛び散る。

捨て身であれやるか・・・。

俺は奴の背後に大量の刃物を創る。そして抑えている剣の力を弱める。小手のほうだけはかわさんとな・・・。弱めると同時に大量刃物を発射する。

なんとか小手はかわせた。だがナイフが俺の首をかする。危なかったな・・・。あと少しで死んでたぞ。

さあ死ねリクレイ。

大量の刃物がリクレイの背中に刺さる。

「グアアアアアツツ！！！」

さらにリクレイを蹴り飛ばす。壁に当たる。

「孤空円流走牙！」

剣を投げる。そのままブーメランのような動きをしながら空を流れるように、走るようにしてリクレイの腹に刺さる。さらに腹を引き裂き俺のところまで戻る。リクレイ大量の血を吐く。腹からもシャワーのように鮮血があふれだす。そのまま倒れる。

まだ生きてやがる。しぶといな。今とどめをさしてやるよ。

「何だ！？」

リクレイの下から黒い穴が開きその中にリクレイも入っていく。

『コツはまだ死んでいない。いずれまたお前に復習に来る。その時は覚悟しておいたほうがいい。こいつはさらに強くなってお前の前に現れる』

「お前は誰だ！？どこにいる！？出てこい！！」

返事はない。

「チツ」

あいつはいつたい誰なんだ？しかもあいつはまたリクレイが来ると行っていた。さらに強くなつて。あの戦い。俺一人では勝てなかった。あの少女がいなきや死んでいた。助けてもらったお礼をしなくちゃな。そっぴやどこ行つたんだ？

俺は少女を探しに行った。あ。傷治さんと。あそこまで魔力が強いと完全に傷は治らんがな。

俺は傷をできるところまで治癒してから少女を探しに行った。

服は血まみれだが。

本編 第三章 再始する者たちは 〈The strength of li

「クロスクロス・・・」

を書いてるときにゲシュタルト崩壊しました

本 編 第四章 本格始動の両者たち

Are those whom

更新遅くなつてすみません

「ったく。どこ行った」

俺は現在人探し中。

ん？待てよ。俺あの場所から離れるときにあいつ見たような気がする。たぶんそうだ。絶対そうだ。なんてこった。自分から離れていたなんて……。とりあえず戻るか。
そして俺は戦っていた場所まで戻った。

「あ」

いた。いましたよ。見つけましたよお客さん。あ。向こうも気づいたようだ。

「大丈夫なんですか？そんなに動いて」

「ああ。問題ない。それよりだお礼をしようと思ってだな」

「お礼……。ですか……」

「お前が攻撃しなきゃ俺はあの時死んでいたからな」

「いいですよ別に。もしかしたらあなたのほうを攻撃していたかもしれないので」

「まあそんな遠慮すんな」

「……わかりました」

「それよりさ」

「何ですか」

「お前男だろ」

「……」

え？俺なんか言っちゃいけないこと言ったかな？まあ一目見たら普

通こいつは女に見られる。こいつは服装からして魔術師だ。肉弾戦をあまりしないやつだ。魔術師の服装は男も女も同じじようなものだ。こいつが来てるのもお決まりの服だ。袖とか丈の長い黒いワンピースみたいなので、その上にマントみたいな。想像がつくだろうか。わかんねえ奴はあれを想像しろ！あの赤い髪の毛で目の下にバーコードがあつて煙草吸つてるあの魔術師を！！まあ基本的魔術師はみんなそんな格好だ。体のラインがわかりにくいから顔を隠すと男か女かわからなくなるのが欠点だ。ちなみにこいつの髪は黒色で、あの着物着てその上に赤の革ジャンを来てる男口調のアレみたいな感じの髪の分け目があつて、長さは背中ぐらいまでだ。んで後ろで縛っている。ポニテではない。顔は女っぽくて性別がわかりづらい。身長は160程度だな。リナより少しでかい。ちなみに俺が何で性別がわかつたかっていうと、俺が普通じゃないからだ。戦闘中はそんなこと気にしてる暇はなかったからわからなかった。ここまで考えるのにわずか0.2秒。

「ありがとうございます」

「・・・急になんだよ」

「今まで初めて会った人に男だつて言われたことなかったんです」
「だらうな」

やつぱりそうか。そりゃそんな顔してたら間違われるわな。可哀そうに。ボクっ娘にみられるんだな。あとこいつの持っている魔道書あれで殴られたら痛そうだな。広辞苑より分厚いぞ。

「まあ何だ。とりあえずついてこい。もう一人莫迦を連れて来ないといかん。」

「はい」

「さーてどこにいつかな。紺だけあると探すの面倒臭えなあ」

「その人はどんな人なんですか？」

「科学者で莫迦で後先考えなく行動する奴」

「わかりました。ついてきてください」

「お前今のでわかるのか」

「本の場所は全部記憶していますからだいたい性格を聞けばその人がどんなものを読むかわかります」

「すごいな」

なんか大切なこと忘れている気がする。あ。わかった。

「自己紹介してねえなあ」

「確かに」

「俺はレイ・テイス。普通の一般人だ」

「血まみれのまま歩いている人を一般人とは言わないと思う」

「どうでもいいだろう」

「良くない」

「んでお前は」

「ルキ・サファイアです」

「女みたいな名前だな」

「やっぱりそう思います」

「ああ」

「あ。いた」

本を読んでいる。あ。眼鏡持ってるんだ。

「おい。その莫迦」

「へ？うわ！何その血！？どつかで戦ってきたでしょ！！」

「ああ戦ってきた。それとここは図書館だ。声がでかい」

「ごめん」

「それよりここから出るぞ。こいつに礼をしたい」

俺はルキを指さす。

「え？何この娘！超可愛い！！え。ちょやばい！！写メとらせて！！」

はしゃぐな。莫迦。こいつ男だわ。

「図書館だ。はしゃぐな」

俺はルキの持っている魔道書をとってリナの頭を殴る。

「あべし」

「なるほど。こう見えてルキは男だと」

「そゆこと」

（女装させたらいいかも・・・）

「今何かものすごく寒気がしたんですが・・・」

「気のせい。気のせい」

「リナがお前に女装させようと考えてた」

「なぜわかったし！？」

「あれ。凶星だった。俺適当に行ったのに」

「変なこと考えないください」

「そんなジト目で見ないで。やめろ！見るなー！！。そんな目で俺を見るなああああ！！」

「五月蠅い」

「スンマソン」

ちなみに俺たちは今ファミレスにいる。コイツ騒ぐから他の場所に移動さ……。強制連行させた。図書館で騒いだらさすがに駄目だからな。

「まあなんだ。喰え」

「じゃあレイのおごりで」

「お前は喰うな」

「何でよ！」

「なんとなくだ」

「酷い」

「五月蠅い」

「僕はいいですよ。そんな食べるほづじゃないですし」

「そんなことは見たらわかる」

「だよな」

「モヤシみたいだしな」

「じゃあ私が食べる」

「お前はちくわでも食ってろ」

俺はちくわをリナに渡す。

「ちょっと。なんで都合よくちくわなんて持ってんのよ」

「お前が喰うかなって思って」

「用意周到ですね」

「流石俺」

「どうでもいいけどその血洗ってきたら？」

「面倒臭い。お前らは好きにしてくれ。俺は外に行ってくる」

俺は諭吉さんを3人置いて店を出る。

貰った煙草を取り出してライターで火をつける。ちなみに俺が能力で無害にした。匂いもない。

・・・。吸い終わったな。

携帯電話が俺を呼んでいる。一応確認はしておこう。

『ピッ』

俺は電源を切った。察しのいいあなたなら誰から来たかももうわかりだろう。

「おい。なんか魔石が盗まれたらしいぞ」

「ああ知ってる。あれがないと災害とか来るんだよな」

魔石が盗まれただと？俺のいた街でも同じことがあった。なんか関係がありそうだな。

「行ってみるか」

路地に入って瞬間移動する。

「潜入完了」

城の中に入った。気配を消し常人からは悟られないように「誰だ貴様!!」悟られた。一瞬だったな。

「俺のことか?悪いけどお前になんて付き合っている時間なんてないんだ。」

「侵入者め!!覚悟!!」

「寝てろ」

首に手刀を入れ気絶させる。

前にあつた扉を開く。ホールみたいな所だな。部屋がすごく広い。

2階、3階もある。廊下みたいなものだが。

「っ!?!誰だ貴様!!」

全く同じ反応かよ。

「侵入者だ!!全員構えろ!!」

2階、3階からも人が出てくる。全員魔術の弾を放ってくる。これくらいの弾幕……。

「よけられるっの」

小声でそう言つて。魔力の弾が床や壁にぶつかり煙を上げる。

「やったか」

「何勘違いしてんだ」

刹那。そこにいた全員に手刀を入れる。時間にして0.1秒にも満たないだろう。一斉に気絶する。

「・・・」

どういうことだ？能力で魔石の場所を探ってみたがなにも魔力を感じなかった。いやエアか。とりあえずここを出よう。

「メモリー・クラッシュ」

面倒事になるのは嫌だからこいつらの「俺がここに来た」という記憶を消した。

どうでもいいが作者よ。こんなメタ発言言つのもなんだが一つ言わせてくれ。

お前ネーミングセンスなさすぎる。そのまんまじゃねえか。

その頃リイナ達は・・・。

「ヤヴァい超美味い!!」

「もうやめましようよ。それ僕たちのお金じゃないんですから」

「いいの！貰ったんだし!!」

「・・・太りますよ」

「大丈夫。私昔から食べても太らない人だから」
「・・・はあ・・・」

喰っていた。

午後7時

知らん間に時間がたっていたな。俺が城に入っただのは昼ごろだったのに。

「おつそーい！！何時間待ったと思ってんのよ！！携帯の電源切ってるし！！」

「すみません。お金、全部使っちゃいました・・・」

「構わん。もともとお前にやった金だ」

「ちよつと、私は無視なの！？」

「あゝはいはい。愚痴なら3千年後聞いてやるから長生きしろよ」

「腹立つわ」

「レイさんたちは旅をしているんですよね」

「ああ」

「旅の理由はリイナさんから聞きました。一緒に行かせてもらえませんか。僕もそのことは気になっていましたし」

「いいぞ。あと「さん」をつけるな」

「ありがとうございます」

「敬語も使わんでいい」

「いえ。これが僕の喋り方なので」

「そうか」

携帯の電源をつける。着歴が「オヤジ」と「リイナ・マティ」で埋め尽くされている。

「すまない」

えーっと。あった。「セル・イース」　こいつは情報屋だ。昔からのダチだ。お友達価格で情報の値段は安くしてくれるものの結構高い。金髪でポニテ。左目が髪で隠してある。戦いで左目に傷を負って左目を失明。治療で俺が治してやることもできるのだが「傷で失明してるとカッコよくない？」とか言って本人は全く気にしてない。長さは腰まで。服は黒色で大きめのチャイナドレスの左側だけあいているみたいな奴だ。こいつを見るときは常に煙草を吸っている。ヘビースモーカーだ。俺が無害にしてやってるから肺は大丈夫だがそうしなければ確実にこいつは死んでいる。ちなみに俺と同じ年だ。裏社会で働いている。

電話の呼び出し音が聞こえる。

『はいもしもし』

「あ。リンか」

『あ。レイ。勝手に旅に出て心配したのだぞ』

「そりゃあ悪かった。セルはいるか？」

『いるよ。ちよつと待ってて』

今のは「リン・テイス」　俺が拾ってきた別世界の人間だ。本名は「十六夜　凜」　拾ったことで俺の名字をつけといた。最近セルの家にいる。膝まで行くほどの黒髪で和人形みたいな髪型だ。可笑しいな。身長140センチと小柄だ。・・・貴様今俺をロリコンだと思っただろ？違うぞ俺はロリコンじゃねえ。服装は青いTシャツで赤いジャンパー。黒いスカートで2層になっていて下に白い

スカートが裾から見える。着物とかのほうが似合うと思うんだがな・
・。可笑しいな。あいつを拾ったのは俺が12歳のとき。その時
あいつが10歳でもう10年も一緒にいるのに全くその時から変わ
っていない。身長も伸びなければ見た目も変わらない。全く不思議
な奴だ。普段いるときの精神年齢は見た目と同じだが（見た目と同
じといっても大人び過ぎているが）スイッチが入ると人格が変わる。
大人な性格になる。それもすごく。ちなみに人を殺すことはなれて
いる。というか慣れさせた。俺が。見た目以上の怪力で何百キロも
ある大剣を軽々と片手で振り回す。

『やあレイ。何の用だい』

「聞きたいことがある。前にそっちの街のスフィアが盗まれただろ。
なんで盗まれたかが知りたい」

『そのことならねえ。んゝ。5千いや1万でどうだ』

「1万でも10万でも好きなだけ銀行からとっていい」

『了解。それはねえただあいつらは単純に水魔石のデータがほしか
つただけなんだよ』

「データ？」

『そう。あいつらは火・風・地・雷とかそのほかのデータはあつた
んだよ。だけど水だけがなかった。それで城のやつらは魔石を欲し
がってた。けれど数日間魔石がなくなると国民が知れば不安を生む
だから黙って数日間借りようとしただけなんだ。しかし、城の詳し
い理由を聞いてない下級兵士どもが家族や友人にそのことを流出し
てしまった。だから国の奴らは魔石がなくなつたときに真っ先に城
の奴らを疑った手わけだ』

「わかった。銀行から金出しといてくれ。パスワードは・・・お前
なら言わなくてもわかるだろ情報屋」

『当然』

「いつか顔見せてやる。ありがとう助かった」

『それじゃ』

「おう」

電話はを切る。

「なありナ。魔力とエアは同じもので良かったんだよね？」

「うん。あつてるけど、私あんまり魔術は専門じゃないんだ。私は科学派だから」

今回のことと前のことは全く関係がなかったようだ。ならなぜ魔石をほしがる。まさか殺すためか。この人間は誰でも魔力、エアを持っている。当然能力を使えばエアは減る。だが空気中からエアを吸収することによって元に戻る。そしてエアを持っているものは無意識のうちにエアを出し続けている。その中でも魔石はかなりのエアを出している。しかも魔石のエアは減らない。人間や魔物の回復に役立つている。今回エアはなくなっていた。おそらく破壊されたかどこか誰の手にもつかない場所へ隠されたかだ……。これでは人間の魔力の回復は遅くなる。エアがなくなれば当然能力の強さも減る。いくら強いやつでもエアがなくなればただの雑魚。たぶん誰かは知らんがそいつは人間を殺そうとしている。エアさえなければ殺しは簡単だ。

もしこれが正しければヤバいかもな……。大量の人間、魔物が殺される。そうなる前に阻止しねえとな。

「リナ。今日は宿に泊まるぞ。ルキ。電話番号だ」

電は番号の書いた紙を渡す。

「いずれこの街を出る。お前も行くなら準備しておいたほうがいい。じゃあ今日のところはこれで」

「大丈夫ですよ。僕の家泊まれば。一人暮らしなので」

「えっ？いいの！？」

「はい。空き部屋もありますし」

「恩に着る」

こうして今日はルキの家に泊まることになった。
さあ。本格的に動かねえとヤバいかもしんねえな。

???

「離しやがれ！！この糞野郎！！僕はあいつを殺さなくちゃいけないんだ！！」

「動くなリクレイ。今のお前じゃ奴には勝てない。だいたいその怪我じゃ無理だ」

「黙れ！！いいからとつとと解放しろ！！」

リクレイは体を鎖で止められ全くエアを使えないようになってる。

「レイア！！貴様後でどうなるかわかってんだろうな！！！」

「知るか。今お前は傷を治せ。お前が暴れるせいで傷口がまた開いたじゃないか。もうこれで何回目だ」

「レイア」という女はリクレイの傷を治癒する。

「しかし。ずいぶん派手にやられたな。力を受けた者がここまでやられるとは……。いったい何者なんだ」

「絶対にテメエもあいつもぶっ殺してやる!!」

『レイア。レイ・テイスとその仲間どもを速やかに……。』

抹殺しろ

本 編 第四章 本格始動の両者たち

Are those who m

タイトルの英語は日本語を翻訳サイトで変えているだけなのでもしかしたらわけわかんない言葉になってるかもしれない

どうでもいいですけどこれ可笑しいですよ

私実はまだ15歳未満なんですよねwww

.....

すいません

ほんとすいません

私グロイの好きなんです

「ひぐらしのなく頃に」とかが好きなんです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6673y/>

神様の道化 ~ The tale which clears fate ~

2011年12月3日22時57分発行